『広島平和科学』7 (1984) pp. 77 − 106 ISBN 0386−3565
Hiroshima Peace Science 7 (1984)

言語の核化(ニュークリアライゼーション)*
― 政治的隠喩としての核アレルギー ―

グレン・D・フック**
岡山大学

The Nuclearization of Language:
Nuclear Allergy as Political Metaphor

Glenn D. HOOK***
Okayama University

SUMMARY

This article explores the role of metaphor in structuring political reality for manipulative purposes. The research is mainly limited to an analysis of nuclear allergy as political metaphor. This metaphor was used most predominantly in the late 1960s to brand opponents of Japan's nuclearization as 'allergic'. By locating antinuclear sentiments in the medical context of disease, those trying to nuclearize Japan were able to invoke the entailment

---

本稿は1983年5月に日本国際政治学会の平和研究分科会において最初の日本語発表，同年8月の国際平和研究学会Györ大会において，最初の英語発表をもとに加筆したものである。英語版は*Journal of Peace Research*, Vol. 21, No. 3, 1984, pp. 259−275所収。日本語論文の作成には，より多くの方から御協力や貴重なコメントをいただいた。心からお礼を申し上げる。

* 筆者は本稿において「核化」という日本語としては耳慣れない概念を用いている。英語のnuclearizationに相当する日本語は今のところなく，かつ適切な訳語も見当らない。従って，日本語として必ずしも適切とは言い難いが，「核と共存すること」といった意味でこの言葉を用いている。具体的に日本における核化は，核兵器生産・保有というより，日本への核兵器持ち込み，核エネルギーの利用という問題として現われている。

** 広島大学平和科学研究センター客員研究員
*** Affiliated Researcher, Institute for Peace Science, Hiroshima University

of the need for a 'cure'. A gradual increase in the number of nuclear-powered (and undoubtedly nuclear-weapon loaded) U. S. ships and submarines making port calls to Japan, criticism of the antinuclear sentiments from the viewpoint of 'international common sense', and the initiation of a propaganda campaign, were used to try to 'cure' the Japanese people's antinuclear 'allergy'. The metaphor functions by transferring the image of 'harmlessness' associated with an allergen to nuclear weapons, and by transferring the image of 'abnormal' associated with a reaction to an allergen to those Japanese opposed to nuclear weapons. Four conclusions are drawn: 1. the metaphor played an important role in structuring political reality; 2. labelling opponents as 'allergic' undermined the democratic discourse; 3. analyzing the inner workings of a metaphor can expose its manipulative power; 4. peace researchers, educators and activists need to exercise care in the use of metaphors and help to promulgate countermetaphors useful for denuclearization.

1. はじめに

軍事化研究は，政治，経済，ときとして社会，文化のさまざまな相に現われる軍事化の種々のレベル，形態，過程の分析に極端に集中してきた。言語それ自体は研究の対象とはならなかった。むしろ，経験論者の伝統に従って言語は単なる「現実」を記述する中立的な手段に過ぎないと看做されてきた。現実を記述するために用いる概念と，その概念が指示する現実世界の対象との相関関係を埒外に置くことによって，軍事化研究は操作の目的をもって政治的現実を構成する上での言語の果たす機能を軽視してきたのである。[1)]

言語の果たす機能については，オーウェル，マルクーゼ等が既に記述している。例えば，オーウェルの反ユートピア小説『1984年』において，党の三つのスローガン「戦争は平和である」，「自由は屈従である」，「無知は力である」のうち，前の二つは，一般に考えられている反意語の同義性を表している。これは，平和と自由の概念が支えている「現実の地図」[2)] をあらかじめ排除しておき，その二つを「閉鎖的定義」[3)] にしてしまう，ということである。この二つのスローガンは「自己完結型仮説」[4)] または「自明の理」[5)] として受け入れる以外にない。仮に，『1984年』に登場する英雄のように，そのスローガンに対して拒否反応を起こすならば，その人を待っているのは，党による真理を強制的に認めさせるための拷問に他ならない。オーウェルは，不朽の論文「政治と英語」において，政治的現実を構成する上での婉曲的表現のもつ機能に言及し，「平定」を例に次のように述べている。「無防備の村が爆撃され，住民は村を追われ，家畜は機関銃をあび，あばら屋が焼夷弾を受け燃え上がっていた」。[6)]「平定」という言葉がベトナムの歴史に汚点を残したことは記憶に新しい。戦争による非戦闘員の殺害，村の爆撃や破壊は，アメリカの「関わり合い」，「プレゼンス」，「進出」から生まれたとするか，アメリカの「介入」，「侵攻」，「侵略」によるとするかは，操作の目的をもって政治的現実を構成する上で極めて重大である。ブレイカーは，言語のもつ構成力，影響力を「社会力」と呼んでいる。[7)]

この社会力は，無意識のうちに発揮されることもありえよう。ラッカが言うように，言葉の機械的反復は，何も物真似をするオウムに限った習慣ではあるまい。『キリスト教徒であるという理由で，貧しいレバノンの山村の住民を「右派」と呼び，

回教徒だという理由だけで隣村の住民を「左派」というのは全く馬鹿げている。だが今やこの習慣はほぼ一般的なものになっている』[8]。オーウェルはこの習慣に陥らないようにと作家達に警告している。「…仮に思想が言語を堕落させるとすれば，言語もまた思想を堕落させうるであろう」と[9]。従って，言語，特に修辞的言語は，目的意識の有無にも拘らず，政治的現実を構成しているのである。

2. 何故隠喩なのか

隠喩は，この点において重大な機能を果たしている。それは，他を犠牲にし，政治的現実の中にある特定の相だけをぼかしたり，隠蔽したり，強調したりする。ベトナム戦争中，隠喩の政治的な力が心苦しい程発揮された。当時，「戦況の一変化」[10]のような通常戦争の隠喩が，「将棋だおし」[11]の隠喩と並び，政策担当者の戦争に対する認識を構成した。また，鳥類学的隠喩によって，戦争支持者と反対者は，「タカ派」と「ハト派」に分けられていた[12]。この種の隠喩は，その正体，現実を部分的にしか捉えていないということを白日の下に曝す意義が大きい。例えば，「白人の責務」という隠喩は，「利潤動機をカモフラージュする」[13]ためにもはや引用されえなくなった。それは一つには，帝国主義の修辞的構造の仮面を断固として剝ぎ取ったオーウェル等の努力の賜物である。ここで隠喩の分析に焦点を当てた第一の理由は，政治的現実を構成する上での隠喩の果たす機能を明確にすることの重要性にある。

第二の理由は，政治指導者の演説の中に隠喩が顕著に見られるという点である。チャーチルの「鉄のカーテン」，毛沢東の「張子の虎」，中曽根首相の「不沈空母」は，直ぐに浮かんでくる。本稿で，佐藤元首相の利用した「核アレルギー」を取り挙げた理由は，こういった隠喩の政治的機能を明らかにするためである。

3. 隠喩とは何か

隠喩をテーマに取り挙げる書物や論文は数多く出版されている[14]にも拘らず，隠喩の定義に関しては一致を見るに至っていない。隠喩の語源は，「転用」を意味するギリシャ語の *metapherein* とされている。アリストテレスは，四種類の「転用」について述べている[15]。(1) 類から種への転用，(2) 種から類への転用，(3) 種

から他の種への転用，(4)類推，である。[16] 隠喩に関する二大学説のうちの一つである「比較説」はアリストテレスによる定義に溯る。[17]

この説は，隠喩を含蓄的比喩とし，「ような」，「ごとき」等の言葉を省いて短縮された簡潔な直喩であるとする。転用される意味は，「隠喩による意味が理解されうる以前に，既に知らされているか」，または「何らかの形で内在しているか」という含みがある。[18] 従って，隠喩的言い回しが字義的表現に置き換えられうるという説を生み出す。例えば，「リチャード王は獅子だ」という隠喩は「リチャード王は勇猛だ」という表現へ置き換えられるとされている。

「比較説」においては，隠喩が新たな情報を提供するものではないとされ，全く同じ論理的，感情的意味内容が字義的に反復されうるとする。隠喩は単に，既に存在する類似性を引き出すものにすぎないとしている。ホッブスやロックのような政治思想家が，ごてごてした，紛らわしい，誤解を招くような修辞的表現を，簡潔な表現に置き換えるように呼びかけた背後には，こうした隠喩に関する考え方がうかがわれる。[19] これもまた経験論者が，隠喩の証明を「現実世界」に探求する要求につながる。ミラーは「証明者」の隠喩やモデルに対する見方においては，いかに政治的現実の証明が可能であるか，次のように述べている。「政治的現実に関する知識は，物理的操作かあるいは経験的実験を通して得られ，また，この知識は，検証される隠喩やモデルに関係なく獲得される」。[20]

もう一つの隠喩の学説は，ブラックの提唱した隠喩の「相互作用説」である。[21] この説は「比較説」にいう隠喩の代用の字義的表現は，事実上，隠喩と全く同じ意味を持つものではないとしている。「貧しき者，それはヨーロッパの黒人なり」という例はブラックの分析によって明らかにされている。ブラックによると「黒人」という語が隠喩の「中心」であり，他の部分は「枠組」となる。『この分脈における中心語である「黒人」は，新しい意味を持つ』と。[22] 更に「この種の隠喩（即ち，この隠喩を使わなければ類似性を識別することが困難な隠喩）の場合には，隠喩は既存の類似性を定式化するというよりは，類似性を創造すると言った方が正確であろう」と。[23] 彼はこの立場を弁護する後の論文において次のように述べている。「前論文に対する不満がいろいろと現れたが，この考え方に対する反発は異常な程であった」。[24] その反発の元になるのは証明可能な世界，即ち，「外界」は

証明可能であると主張する経験論者の考え方に対する挑戦であったからに他ならない。

これまで指摘してきたように，この二大学説にはさまざまな相違や差があるにも拘らず，これまで頭の中で無関係であったものを一つに結びつけるという隠喩の果たす機能の点においては共通している。それは，XあるいはXのある特定の相をYにくっつけるという思考過程を意味する。あるいは，X観がYによって影響されるという意味である。最初に隠喩を読み聞きする時，字義的で文字どうりの方が好ましいとして隠喩を否定する反応が起こりえよう。先に引用した「リチャード王は獅子だ」という隠喩はリチャード王は二足動物であり，獅子は四足動物であるから否定されよう。しかし，第二段階において隠喩の成功に不可欠なこと，即ち，これまで無関係であったものの結合が起こり，二重の意味が生じてくる。第二段階においては，隠喩を成功させるために必要不可欠な「勇猛さ」に焦点が集まる。第三の最終段階において，隠喩は日常語化され，机の「足」と同じく「死にたえた隠喩」となったり，廃れたり，変形したりする。[25)]

4. 基本的隠喩

「現実」を構成する上で重要な機能を果たしているのは「基本的隠喩」である。[26)] その一つである機械論的隠喩は，ホッブス，ロック，モンテスキューといった政治思想家の説に重大な影響を与えた。[27)] ドイッチは機械論的隠喩の含意について次のように述べている。「単純で不変な法則に従う，一組の単純で不変な要素が発見されなければならない。次に，その要素から生まれた慎重な政治行為に関する単純で不変な原則が…推論によって演繹され，観察によって証明される」。[28)] 逆に，バークのいう有機体論的隠喩には，成長という含意がある。アメリカは「英国という幹の最も成長している枝であり」，「伝統的共同体の成長」，「帝国の成長」である。[29)] バークは英国憲法の将来改正される可能性から目を逸らしたことによって，純粋の有機体論者であったとは言えないとラブは指摘する。[30)] だがそれ以来の，極端な有機体論者が隠喩の含意を徹底させた。「国家は，隠喩的にではなく，真に有機体である」と。[31)]

有機体論的隠喩は，現在の政治学においてはめったに用いられていない。それよりも，

機械論的，人工頭脳的隠喩が支配的である。これは，技術的変化が政治認識に影響していることを物語っている。[32]社会学の領域において，マルクーゼは技術的変化が新しい型の社会統制を生み出し，機械論的隠喩がいかに現代生活のあらゆる面に浸透しているかについて詳述している。[33] 西欧の環境認識も，基本的隠喩によって構成されてきた。[34] 中世における自然学書，ルネッサンス期における宇宙の縮図としての人間，現代における機械としての地球，というように時代の基本的隠喩が変わってくる。これは自然に対する知覚の変化を意味する。つまり，聖書を通して理解する神中心の自然から，自己を知ることによって理解できる自然へ，そして人間が操作しコントロールしうる「地球機械」への変化である。たとえ基本的隠喩が，ある特定の時期に，特定の研究分野にいかに支配的であろうとも，肝要なのは，それが他を犠牲にし，現実のある特定の相だけにスポットライトを当てる機能を果たすことである。従って，「現実の地図」は完全に間違っているというわけではなく，むしろ不完全であると言った方が正確であろう。[35]

5. 隠喩としての病気

病気の隠喩は，基本的隠喩ほど現実を構成する力を持っていないにしても，隠喩の操作力について論じる上で言及する価値がある。その理由は，治療の必要性があるとする規範的ニュアンスが含まれているからである。[36]ソンタグは，結核が追放された後，いかにして癌の隠喩が結核の隠喩の代わりに用いられるようになり，また，結核と癌に関する経済的隠喩がどのように異なっているかを分析している。

「初期の資本主義では，消費，貯蓄，経理の管理が必要とされる ── それは欲望の合理的な制限に基礎を置く経済である。結核は十九世紀経済人（ホモ・エコノミクス）の負の活動，つまり消費，浪費，生命力の消耗といったイメージを利用して描かれる。高度資本主義は拡張，投機，新しい欲求の産出（満足・不満足の創出に関係する問題である），信用購入，流通性を必要とする ── それは欲望の不合理なまでの充足に基礎をおく経済である。癌は二十世紀経済人の負の活動である異常成長，エネルギー抑制，つまり消費拒否のイメージとして描かれる」。[37]

しかし癌および癌治療の中心的隠喩は経済的隠喩ではなく，軍事的隠喩である。癌細胞が患者の体に「侵入」し，「防衛体制」を破壊し，転移によって体に「植民地」を作る。唯一の治療法は隠喩的な軍事逆襲である。そこで，放射線療法では，有毒な放射線を用いて体を「空爆」する。化学療法では，化学戦争と同様に毒物をばらまく。癌細胞は殺されるか，外科的な「介入」により切除される。「癌戦争」は，癌を「殺す」（患者の方は殺さずに）ことにより勝利をおさめる戦略である。[38]

ソンタグは癌が「最大の敵…にまで拡大投影されてしまう…」と指摘する。[39] このことは，「共産主義という癌」の隠喩が，何故極右反共主義者の言述（ディスコース）の中に浸透しているかを示めす。例えば，ロバート・ウェルチの「ジョンバーチ協会の青書」の中には，「病気」，「ウィルス」，「潰瘍」，「癌」などの隠喩が表れている。[40] ウェルチは共産主義者が「我々の癌組織を攪乱し，ウィルスを再移植し，それを蔓延させる」ことに対してやめよと絶叫する。「集産主義という癌」（そのためにヨーロッパが死に瀕しているのだが）が，アメリカにおいても既にかなり広がっている。その治療法は癌の「切除」しかない。というのは，個人と同様，「文明もやがては癌という悪性の病に倒れてしまう」からである。このような，隠喩的な言い回しを利用することによって，右翼がブーツで共産主義者の顔を押し潰すという残酷なイメージを回避し，むしろ，外科医の手術用のメスが患者の病んだ肉体から異物を切り取るという洗練されたクリニカルなイメージを惹起する。

病気を隠喩として用いるのは極右反共主義者に限ったことではない。ダグラス判事は，1950年代の都市再開発について次のように述べている。「そのコミニュティーが健康で，かつ，先天的に病を背負ったような不健全な地域やスラム街に再び戻ることのないようにするならば，その地域のために全面的な都市計画が必要であると専門家は結論を下している」。[41] ダグラス判事の発言には極右反共主義者と同様な病気－治療のつながりが見られる。

6. 位置づけ，文脈，含意

これまでの例から，隠喩としての病気は，ある含意を喚起する，ある文脈の中

に，一つの問題を位置づけることにより，現実を構成する上でいかに隠喩が機能しているかということが分かる。[42] 前例の病気の隠喩としてのスラム街においては，病気ー治療というつながりでスラム街問題を位置づけることによって，新しいコミニュティーを建設するために古い建物を取り壊し，設計し直し，再建するという含意を喚起する。[43] もう一つの例は，エネルギー危機に際し，カーター元大統領が用いた戦争隠喩が，この危機を，「ハード・エネルギー」の道を歩み続ける含意を持った政治的文脈の中に位置づけたものである。

『「敵」が存在し，「国家の安全が脅かされている」。そのためには，「目標を定め」，「優先順位を改組し」，「新たな指揮体系を確立し」，「新戦略を練り」，「情報を収集し」，「軍隊を結集し」，「制裁を課し」，「犠牲を要求する」等が必要である。この戦争の隠喩はある特定の現実だけに光をあて，他を隠蔽している。この隠喩は単に，現実の一つの捉え方というだけでなく，政策の変更，政治および経済行動に対する許可書の役割を果たした。この隠喩を容認することは，正に，ある推理のために根拠を提供することになった。即ち，外部に，国外に，恐るべき敵がいる。（風刺漫画家がアラブのかぶりものを被った人の絵を描いているように）エネルギーは最優先されなければならない。国民は犠牲を払わなければならない。もしこの脅威に立ち向かわなければ生き残れないであろうと』。[44]

また，レーガン政権が中米の左翼勢力との調停や交渉を拒否している状況下で，政治的現実を構成する上で隠喩の果たす機能は，政権のスポークスマンによる声明発表から明らかである。例えば，あるスポークスマンは「中米政策を外交の場で，英国紅茶とクッキーを前にして論ずる」ことは不可能だと語った。[45] これは，アメリカの安全が「共産主義という癌」の蔓延によって脅威に曝されていると見られる現代世界においてではなく，大英帝国が世界の海を制覇していた頃の，のんびりとした古き良き時代の紳士が，英国紅茶を楽しむために集まったというソフトなイメージを惹起する。それ故，中米の左翼勢力の問題は共産主義対民主主義の対立の文脈の中に位置づけられる。このことは，ベトナム戦争の含意，つまり，軍事援助や介入を暗示している。そこで，交渉の道を求めるのではなく全面的な力の行使ということが，ベトナム戦争で味わったような屈辱的な敗北から，

ニクソン元大統領の言う「哀れな巨人」であるアメリカを救うために，このような位置づけをしたことの含意の一つであると認められる可能性があろう。

7. 隠喩としての核アレルギー

これまで，隠喩，位置づけ，文脈，含意がいかにして現実を構成し新たな知覚を創造するかを明らかにしてきた。特定の隠喩の使用や，ある政治的文脈の中に現象を位置づけるということは，単に政治的現実を記述しようとすることから生じたり，機械的反復からも生じうるものである。しかし本稿のテーマは，他を犠牲にしたり，ある特定の政治的選択をぼかしたり，隠蔽したり，強調したり，あるいは，政治操作のための位置づけ，文脈，含意を喚起するために計画的に利用される隠喩である。

その適例は，「核アレルギー」という隠喩である。最初，先行の隠喩「核兵器アレルギー」が，朝日新聞のワシントン特派員によって書かれた1964年8月付の記事に登場した。この隠喩は，最初に，日本政府がはじめて米原子力潜水艦の日本寄港を承認した当時の，日本国民の「核兵器」という表現に対する敏感な反応を，特徴づけるために用いられた。特派員は次のように述べている。

『米政府としては「核兵器」ということばに，日本人がきわめて敏感であることを理解しているだけに，この問題に対する態度は終始慎重をきわめ，いわゆる「圧力をかけた」という印象を絶対に与えないようにつとめてきた』。[46]

基本的には，すべてのノーチラス型原子力潜水艦に対潜艦用ロケット核魚雷サブロックが配備される計画になっていることが問題の核心であった。というのは，1964年において日本政府は既に日本への核兵器持ち込みは，日米両国間の事前協議の対象になる，という立場をとっていたからである。[47]アメリカ側が日本へ寄港する前に一時的に核兵器を降してくるという理論上の可能性が生じてくる。問題の隠喩が登場したのは，次の文脈の中であった。

『国務省でもポラリス寄港を否定するような明確な形での言明はなく「サブロックの話は聞いていない」というだけである。その背景には，米側をもっと信頼してもらいたい，ということ，それに時間をかければ日本の「核兵器アレルギー」はおさまるだろうということがあるようだ』。

前述の文脈の中に核兵器隠喩が登場したということは，アメリカ政府の日本に対する態度，もっと正確に言えば，アメリカ政府高官の日本国民に対する態度を特徴づけるために造り出された隠喩である，ということがうかがわれる。この段階においては，特定の核政策を推進させるための政治的隠喩ではない。これは次の二つのことから明確である。第一に，その隠喩は中立的に用いられている。つまり，日本の米核戦略体制の中に組み入れるように推進しているわけでもなく，反対もしていない。第二に，核兵器隠喩，この二つの目的のうちのいずれか一つを取ってみても，それを推進させるための政治的有効性が欠如している。それは，隠喩それ自体に内在している「兵器」という消極的なシンボルが含まれていることに由来している。もし，その隠喩が，もともと日本の核化を推進するために造り出されたものであるとすれば，「核兵器アレルギー」ではなく，「核アレルギー」という隠喩が政治用語の中に加えられたはずである。それとは逆に，もしその隠喩を造り出したもともとの目的が，日本の米核戦略体制の中に組み入れることに反対することであったならば，民主主義の市民権を連想させるような政治的文脈の中に日本国民の反核感情を位置づけるために，「アレルギー」という語は隠喩の中に内在しているはずがない。その理由は明白である。「アレルギー」という語の消極的含意は，非核化を推進する意味合いを持った政治的文脈の中に反核感情を位置づけるために有効ではないからである。

前述のことから二つの結果が導かれる。第一に，「核兵器アレルギー」という隠喩は消滅した。換言すれば，政治的隠喩の有効な機能の妨げとなった「兵器」が消え，政治的隠喩としての核アレルギーが日本の政治舞台に登場したのである。第二に，その際に核アレルギーという政治的隠喩は，日本の核化推進に反対した者に対して有効に利用された。もちろん，政府の政策に反対した者も同じ隠喩を用いたこともあった。しかし，「アレルギー」という語の消極的意味合いは，治療の必要性という規範的な反応を連想させる含意を内在しているが故に，この隠喩は核化反対のために利用すべき政治的有効性が欠如している。従って，この隠喩が，核化政策を講じる政府に反対するために用いられるのは，国民の反核感情をアレルギーとして隠喩的に表現することを非正当化するためである，ということになろう。そのことは正に核アレルギー隠喩が，1967年10月付の朝日新聞社説に

登場した文脈からうかがわれる。当時，日本政府は，国民の不満の声を耳にいれず，原子力（核兵器積載）米空母，エンタープライズの第一回の日本寄港を承認した。

「通常の原子力潜水艦から始って，原子力空母，巡洋艦，駆逐艦となり，日本国民がなれるに従って，ついにはポラリス潜水艦の寄港に進みはしないか。知らぬ間に，アメリカの核兵器の基地として，日本の港が利用されることになりはしないか。そういう巧妙ななしくずしの既成事実づくりが進められているのではないか。そういう不安をわれわれ日本人の大部分が抱いている。他国の基地を使用するアメリカとしては，このような日本国民の感情を，単に核アレルギーなどといって軽視してはなるまい」。[48]

ここで三点を強調したい。まず第一に，確認できる限りにおいては，「核兵器アレルギー」も，「核アレルギー」も，アメリカ政府役人ではなく，朝日新聞の特派員や論説委員によってはじめて用いられた。[49] 第二に，社説は，日本国民の反核感情をそれとなく支持はしているものの，反核感情を侮辱するために政治的隠喩として利用されている隠喩と全く同じものを用いている。第三に，このことは，日本国民の反核感情を支持し，非核化を推進する政治的文脈の中に反核感情を位置づけるような強力な「反対隠喩」[50] が国内の情報環境の中に浸透しなかったということを意味している。政治的隠喩としての核アレルギーの力を明確にするために，これら三点のそれぞれについて詳しく分析してみよう。

8. 政治的隠喩としての核アレルギーの力

第一点について言えば，核アレルギーという隠喩の命名の責任がアメリカにあるという幻想を植え付けることは，日本の核化の反対者も支持者も双方の目的に適っている。前者にとってはアメリカが「敵」であり，それは核超大国であるか帝国主義大国であるかは問題ではなく，いずれにせよアメリカに反対する，それ自体が当時の重要な政治課題であった。核アレルギー隠喩の命名者としてのアメリカに反対することは，政治というシンボリックな世界における「反米」を意味している。朝日新聞の反米的立場は，引用の社説やその他の社説で明白である。[51] 他方，日本を米核戦略体制の中に組み入れ，核化を支持している者にとっては，

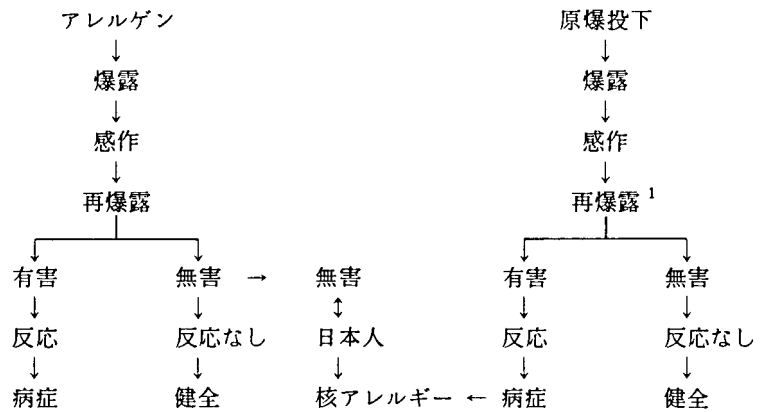
この隠喩の命名の責任がアメリカにあるという幻想を植え付けることは，反対者にアレルギー患者という烙印を押し，反対者を，健全な国家の中に発生した異常，有害，病的分子であると位置づけること，即ち，治療の必要性を連想させる文脈の中に位置づけることを容易にする。多くの日本国民にとって，アメリカが国際社会における正常な態度や行動の基準を設ける「準拠国」となっており[52]，アメリカが日本国民の反核感情，態度，行動を「核アレルギー」という隠喩をもって病気－治療の文脈の中に位置づけることは，日本が正常で，健全な政治行為体として国際舞台に登場することを希望する勢力にとっては，国民の反核感情を根絶することが死活の政治課題であった，ということを意味する。それ故日本は，アメリカの同盟国である以上，アメリカ政府の核政策に文句を付けることは，「国際常識」に反することであるというような声が上がっていた。[53]もちろん，被爆者の政治的影響力や国民の反核感情による政治的影響力は核化の道を歩もうとする政府にとっては，ある程度ブレーキをかけた。しかし，政治的隠喩としての核アレルギーの使用が最高頂に達していた頃（1966年～1968年），核アレルギーを「解消」しようとしていた佐藤政権の政策に反対することは，国際常識の既定の基準に反することであった，という「常識」が日本の核化を容易にしたのである。

以上のことから，日本の核化の支持者も反対者も，自らの政治的目的のために，政治的隠喩としての「核アレルギー」をいかに利用したかがうかがわれる。アレルギー隠喩は多種多様な政治的目的のために戦術上，操作上有効に利用されたが，病気－治療という文脈の中に，政府の反対者を位置づけるために最も有効に利用されたと言えよう。

次に第二点（日本国民の反核感情を支持する者も核アレルギー隠喩を用いたという点）に移ろう。政治的隠喩としての核アレルギーの力は当然のことながら隠喩としての核アレルギーの機能と関係している。隠喩の成否は，アレルギー患者のアレルギーを引き起こす，アレルゲンに対する反応と，日本国民の「核」アレルゲンに対する反応との間に，いかに高い類似性があるかという点にかかっている。Y（日本国民）がX（アレルギー），あるいはXのある特定の相が内在すると看做す過程を通して，これまで頭の中で無関係であったものが，一つに結ばれ，その隠喩が第二段階に進む。

病理学的に言うと，アレルギーになる過程は次のようになる。ある人がアレルゲンに曝され，その結果過敏になる。同じアレルゲンに再度曝されると，その人に異常反能が起こる。

これを日本人の「核アレルギー反応」に当てはめると，日本人は広島，長崎に原爆が投下されたことによりアレルゲンに曝され，その結果核に対して過敏になった（図1参照）。再びこの核アレルゲンに曝されると，国民の間に異常反応が起こる（図2参照）。この異常反応を「日本の核アレルギー」という。[54] こうして隠



1　核実験，原子力（核兵器積載）空母，潜水艦入港など

図1　核アレルギー隠喩の形成過程

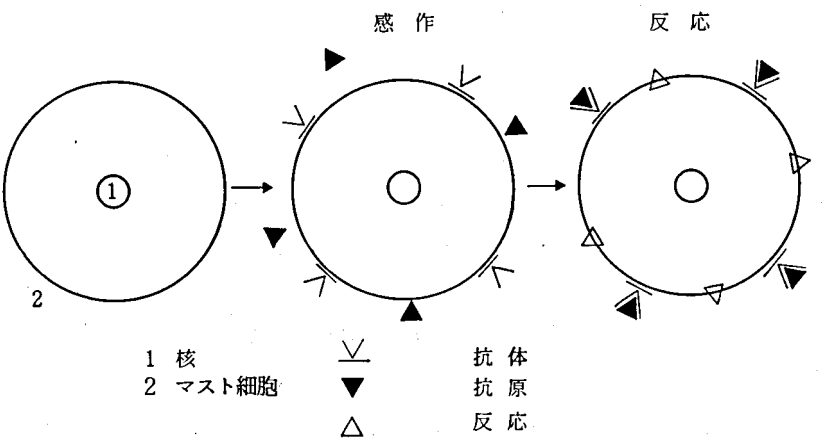


図2　アレルギー反応（抗原＋抗体→反応）

喩としての核アレルギーが成功した。しかしながら，この隠喩は，政府が日本の核化の反対者にアレルギー患者という烙印を押し，反対者を異常，有害，病的分子であると政治的に位置づける以外に有効な政治的隠喩ではない。つまり，隠喩としての核アレルギーの背後に隠蔽されている要素は核化の反対者にとって，政治的に有効ではない。特に次の二点は考慮に値する。

第一に，アレルギー反応を引き起こすアレルゲンは，アレルギー体質の人以外にとって全く無害である。アレルギーとは，「大部分の人や動物にとって普段何の害もない媒介物に接触すると，ある特定の人や動物に特異な珍しい病状が起こる異常反応のことである」。[55] 隠喩としての核アレルギーは，これまで無関係であったもの ― 核とアレルゲンが持つ無害というイメージとの連想 ― を一つに結びあわせる機能を果たす。そのため核兵器は無害であると連想されやすくなる。非核化の支持者がこの隠喩を政治的に利用するのに限界があるという第一の理由は正にこの点である。

第二の理由は，核兵器やそれ以外の核に無害なイメージを転用することによって，「核アレルゲン」に再度曝されることに反対している日本人に，異常というイメージを転用することができる，ということである。異常というイメージを転用することによって次のような「現実の地図」が描きやすくなる。即ち，国際社会において異常なものは，核戦争の脅威でもなければ，核兵器の存在でもない。それは，核化反対者や反核感情の存在それ自体が脅威なのである。核という「病気」の問題の核心（病気の隠喩に固執するが）は，核兵器の存在から核兵器反対者の存在に移行してきた。こうした理由から，核という「病気」の治療法は，核戦争や核兵器の脅威を排除することではなく，核化反対者や反核感情を排除することに他ならないということになる。媒介物（核）と受容者（日本人）が入れ替わる。核アレルギー隠喩によってぼかされたり，隠蔽されたり，強調されたりするものは，「核現実の地図」の持続の支えとなり，非核化への方向転換の妨げとなる。

次に第三点（日本国民の反核感情を高く評価し，その願いを民主主義という政治的文脈の中に位置づける強力な「反対隠喩」がなされていないという点）に移ろう。三つの理由が考えられる。第一に，核アレルギー隠喩のもつ曖昧さである。

この曖昧さが，核アレルギー隠喩を政治舞台の中心部へと押し出し，生き続けさせ，非核化を推進する反対隠喩が政治舞台の中心部に登場することの妨げとなった。この曖昧さは，政治的隠喩の機能にとって極めて重要であると考えられる。[56] 第二に，リンドが言うように，「…国政の場であれ，日常生活の相互的活動の場であれ，いずれにせよ権力の座に就く者は自らの隠喩を他人に押しつけるようになる」。[57]「核アレルギー解消」という1967年になされた佐藤元首相の呼掛けが，日米間の核問題が重要な分岐点に立っていた当時，核アレルギーという隠喩を政治舞台の中心部に据える上で，決定的な役割を果たしたことは，正にリンドの言う通りである。第三に，非核化を推進しようとする側に，隠喩のもつ政治力に対する認識が不足しているという点である。いずれにせよ，有効な反対隠喩の欠如が，核化反対者にアレルギーという烙印を押すような「核アレルギー隠喩」を情報環境の中で主流たらしめたのである。

以上のことから，二つの結果が生ずる。第一に，イメージのレベルにおいてアレルギー隠喩が日本の情報環境に浸透したということが，核問題を医学的文脈の中に位置づけやすくしたということである。ここで重要なのは，(一) 医者，(二) 患者，(三) 治療というイメージを連想させる隠喩的含意である。医者と患者の関係は，支配－服従的，ヒエラルキー的関係である。専門的な知識を持つ医者は，患者の病気に適した治療法を決定する立場にある。アレルギー患者の治療法の一

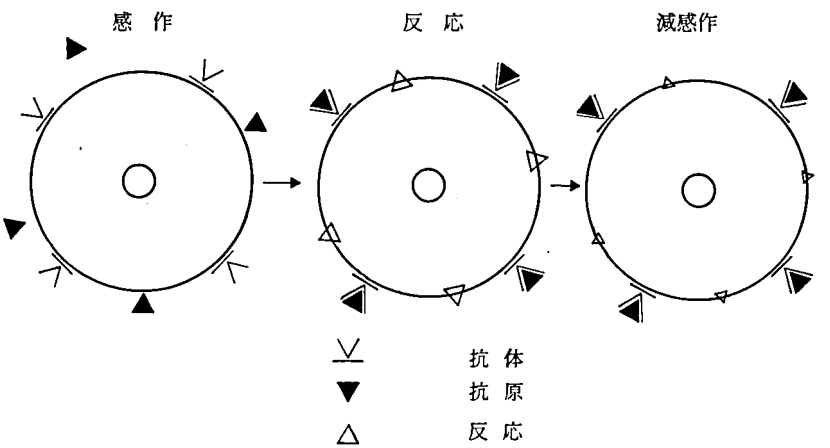


図3　減 感 作

つに減感作治療法というのがある（図3参照）。この治療法は，患者に与えるアレルゲンの量を徐々に増やしてゆくことによって異常なアレルギー反応を減らしたり完全に無くしたりするという原理に基づくものである。

これを隠喩的文脈の中に位置づけると，医者は佐藤元首相，患者は日本の核化反対者，治療法は反対者に徐々に「核アレルゲン」を与えること，というようになる。核アレルギー解消を呼び掛けた佐藤元首相の1967年の「参議院沖縄問題等に関する特別委員会」における発言は，核アレルギー隠喩の含意を解明するための適例である。当時の最大の争点は，沖縄が「本土並み」に復帰するのか，それとも佐藤内閣が「核兵器付」の沖縄返還を認めざるをえないのか，ということであった。公明党の黒柳明議員が首相に次のように質問した。[58)]

「…国民が，日本全体が核アレルギーになっている，こういうふうに言われております。自民党内部でもこの国民の核アレルギーを何とかして解消しなければならぬ，こういうようなお話し合いもしておるやに聞いておりますが，要するに，核の脅威，核はおっかないのだ，確かにそうだと思います。と同時に，もう一歩，私たちが核に対して正しい理解をしていかなければならない，核に対する正確な理解というものを与えていかなければならぬときが来たのじゃないかと，こういうふうに一部の学者は言っておるし，そういう意見もありますが，総理の御見解いかがですか」。

これに対し首相は次のように答弁した。

「次に核アレルギーのお話が出ております。これは，核アレルギーというもの，これを解消することは必要だと思いますが，これは核というものに対する正しい理解を持たない結果だと，かようにも言えると思います。正しい理解を持つならば，いわゆる核アレルギーにもならないだろう，また，平和利用等についてはですね，もっと核の持つ力を高く評価してしかるべきじゃないか，かように思いますので，ただいま御指摘になりましたように，私は，正しい理解を持つようにこの上とも努力すべきだと，かように思っております。ただ単にこれが兵器というだけではないのでございまして，そういう意味では正しい理解をすることが必要だ」。

首相の答弁は核問題を，病気－治療の文脈の中に位置づけている。核兵器およ

び原子力エネルギーに関する政府政策を容易に実施するためには，核アレルギーを治療することが必要であった，と首相には理解された。政治の嵐を引き起こした首相の核アレルギー解消の呼掛けも，政府の戦略であったと，当時の首席秘書官が語っている。

「核アレルギーともいうべき国民感情のなかで，これまでなるべく核の問題にはさわらない方がよいという政治の流れみたいなものがあったが，佐藤総理は非核三原則を背景に，あえてそのタブーに挑戦したのである」。[59]

首相は，「核アレルギー」という政治的隠喩を利用することによって，政府が世論を操作している，また，核問題がもはやタブーではないような文脈の中に安全保障言述（ディスコース）を位置づけるための宣伝戦を繰り広げるために政府機関を利用している，という具体的なイメージを惹起するのを回避することができた。[60]核アレルギー隠喩の果たす機能は，無人の殺菌された医学の世界においてアレルギーを排泄してしまうというイメージか，あるいは医者が患者を治療するというイメージか，そのいずれかを喚起することである。これはアレルギー患者の共感を呼ばない。換言すれば，日本の核化反対者に支持されない。

三つの減感作療法が適用された。[61]第一に，日本人は徐々に「核アレルゲン」に曝されてきた。それは原子力（核兵器搭載）潜水艦や空母の寄港回数が徐々に増え，結局，米原子力潜水艦等の日本寄港に際して，現在では，ほとんど抗議の運動が盛上がらなくなったということに関係してくる。[62]第二に，以上にも触れたように，国際常識（理性）という観点から，反核感情（感性）に対する批判の声が上がってきた。第三に，佐藤元首相が言ったように，核に対する『「正しい」理解を持つ』ために政府宣伝機関によって「正しい」知識が国民に与えられてきた。[63]

第二の結果は第一の結果と密接に関係している。それは，核アレルギー隠喩が用いられる以上，アレルギーの具体的な現れである反核デモは，医学的文脈の中に位置づけられる。従って，核アレルギー隠喩とそれに付随している治療の含意に反対し，非核化を推進する勢力にとって，表現の上で，医学的文脈の範囲を越えることは困難であった。こうした理由から，核アレルギー論争がたけなわであった当時，国内において猛威を振るっていた議論が，即ち，核アレルギーは健全なのか，正当な病気なのか，蔓延すべき病気なのか等々，堂々巡りをしていた

ことは，まさに医学的文脈の範囲内の発言であったことを示唆している。ここで強調すべき点は，首相がその論争を医学的文脈の中に位置づけることによって，核化反対者が，同じ論争を民主主義の原理という文脈の中に位置づけることができなかった，ということである。[64] つまり，政治的隠喩としての核アレルギーは，米潜水艦や空母の日本寄港に反対する国民の反核感情を，民主主義国家の国民の権利である「言論の自由」の文脈の中に位置づけることを困難にしたのである。少なくとも，朝日新聞の社説やその主な記事は，そういった文脈の中に位置づけなかったようである。寄港反対の抗議が民主主義の原理の文脈の中で取り挙げられた稀な例は，朝日新聞の社説ではなく，他ならぬ日本に寄港した米潜水艦の艦長とのインタビューの中であった。

「来るたびにデモ騒ぎが続くが，デモも一種の言論の自由の現れであり，米国でもあり得る」。[65]

以上のことから明らかなように，核アレルギー隠喩が民主主義の原理の文脈の中で非正当化されなかった理由は，隠喩の力に根ざしていると言えよう。しかし，もう一つの理由は，政治文化に由来していると考えられる。それは，本土の米核戦略体制に組み入れることに対する反核運動や抗議は，「臣従型政治文化」の中の市民という概念に挑戦したと言えよう。[66] つまり，政治的隠喩としての核アレルギーが，日本の核化の支持者と反対者の間の論争の中心となった理由は，正に，反核運動が臣民としての市民の概念に挑戦するものであったからに他ならない。

9. 結　論

政治的隠喩としての核アレルギーのこれまでの分析から，隠喩が政治的現実を構成する上でいかなる機能を果たしてきたかが明らかになったことであろう。核アレルギー隠喩は被爆体験の意義を非正当化するために利用され，それに対する反対があったにせよ，隠喩それ自体が医学的世界における治療の必要性の意味合いを喚起する「現実」を構成したことによって，日本の核化推進者に有利な情報を提供した，ということを意味する。もちろん，これは核アレルギー隠喩が日本の核化反対者にとって全く政治的価値を持たなかったという意味ではない。佐藤元首相がこの隠喩を利用したことをめぐって展開された政治論争は，当時の反核

感情がいかに強かったかを物語っている。むしろ，日本の反核運動が国際的に「異常」であったために，「アレルギー」という烙印が押されてしまった。それ故，政治的隠喩としての核アレルギーの背後には，日本の反核運動の弱さというよりは，非軍事化の言述（ディスコース）を生み出す国際的反核運動の弱さがあったと言えよう。

政治的隠喩としての核アレルギーは，核兵器の存在を正当化し，国民の間に反核感情の正当性に対する疑いの種を蒔くように，政治的現実を構成する機能を果たした。アレルギーは正常であるということは事実に反する。しかし，現状それ自体，また，政治指導者が考える「現実の地図」を前提として認めるならば，核兵器の存在が正常であるという事は現実（事実）に反しない。それ故，日本人の核アレルギーの治療を要求することは，「正常な現実の地図」を認めるように要求すること，即ち，広島や長崎が持つ意味の否定を要求することになる。反核側に限っていえば，原爆投下の持つ意味は明白である。それは，日本政府が核軍縮のために邁進すべく責任を担っている，ということである。ところが，政府はこの責任を徹底的に果たそうとするよりも，国際的な支配価値と定義される「正常な現実の地図」を国民の間に認めさせるように努めてきた。つまり，日本を守るための抑止力として米核兵器を認めることは正常なことであるとする国民の合意を形成するように努めてきた。核アレルギー隠喩が政治論争の中核となり，政府が非核三原則を国是と定めた理由は，広島，長崎の遺産が政府に対する反核感情や活動の中に具体的に現れていたからに他ならない。日本の政治的現実を構成する上で政府が果たした役割は，国内および国外からの圧力との相剋から生まれたものであったと言えよう。佐藤内閣は，一方にアメリカ政府から，もう一方に国内の反核勢力や反核感情からという双方からの要求の間で板挟みになっていたのである。

第二の結論は，政府の反対者にアレルギーという烙印を押すために隠喩が有効な機能を果たしたということである。政治的隠喩としての核アレルギーがそのように機能した。つまり，隠喩は反核論者すべてに烙印を押すために無差別に利用されたのではなく，自民党政権の認める核化に反対する者，特に日本の米核戦略体制への組み入れに反対する者に対して適用された。佐藤元首相は反対者にアレルギーという烙印を押すことによって，日本の安全保障問題をめぐる民主的な言述（イスコース）を巧みに弱めたのである。

第三の結論は，政治的隠喩の隠蔽された機能の正体を暴くことの重要性である。これは言語の政治的機能を理解する上で役立つので，特に平和教育者は政治的隠喩などの機能を解明する教材を作成する意義があろう。[67] もし，平和研究者が非核化過程において個人の果たす役割を真摯に考慮するならば，核化支持者の態度に非核化推進へ，更に行動へというような一連の変化を生じさせてゆくことは，極めて重要な課題となろう。態度の変化だけでは，非核化を促す十分条件とはならないことは言う迄もあるまいが，それでも必要条件ではあろう。政治的隠喩がいかに人間を欺瞞しうるかを解明することは，隠喩を世論操作のためにいかに利用しうるかを明らかにする手掛りとなろう。このことは，軍事化を支える現体制を正当化するために言語がいかに利用されているかのより深い理解へとつながってゆこう。

第四の結論は，非核化を推進する側にとって新しい政治的言述（ディスコース）を生み出す上で隠喩がいかに重要な機能を果たしうるか，ということである。平和研究者，教育者，運動家は，核化を支える隠喩の使用を避け，非核化を推進する反対隠喩の宣伝，普及に邁進する必要があろう。反対隠喩は，核化の危険性・非核化の必要性にスポットライトを当てるように機能すべきである。隠喩は新しく創造されるか，または，既に創造されているものを自らの目的のために利用するか，いずれも可能であろう。前者の例としては，1950年代に，バートランド・ラッセルが核戦争を疫病に対する衛生処置という文脈の中に位置づけた。[68] この隠喩も，病気ー治療の文脈の中に位置づけてはいるが，特に次の二点においてアレルギー隠喩とは異なっている。まず第一に，反核感情ではなく核戦争や核兵器が隠喩の中核になっていること。第二に，その含意が共通の敵（核戦争の脅威）に対する世界中の人々による「連帯行動」を呼び掛けていること。この隠喩は，核という敵に対する人類共通の闘争という普遍的な言述（ディスコース）を示唆する。[69]

最近のヨーロッパ反核運動家に，「オランダ病」という烙印を押すことによってその運動を侮辱しようとした核化推進論者の企ては成功しなかった。[70] これは，反核運動がその政治的隠喩を以上の後者の例である「自らの目的」のために利用することができたからである。この隠喩とアレルギー隠喩の中核が共通している。即ち，反核感情や運動を「異常」という病気の文脈の中に位置づけている点であ

る。然るに，注目すべき相違点は「オランダ病」の場合に伝染病という含意が連想されるという点である。日本のように守勢に立ってアレルギーという病を正常なものとして正当化しようとする代わりに，ヨーロッパの反核運動家は「オランダ病」という隠喩の持つもう一つの含意(病気の蔓延)に焦点をあてた。それは，治療の含意の正当性に攻撃を加えるという意味を持つ。治療という含意を連想させるような文脈の中に反核運動を位置づけることによって，核化推進者側は反核運動を侮辱しようとした。しかし，反核運動家に「オランダ病」という病気の隠喩の烙印を押すことは困難であり，「治療」するより「伝染」したほうが良いと考えるヨーロッパ人が多くなってきている結果として，この隠喩は，ヨーロッパの他の地域に反核運動を広げるための反対隠喩に変身した。これは，二つの意味を持つ。一つは反核運動が新しい政治的言述(ディスコース)を創造し，核肯定論を支えている「意味体制」に揺さぶりをかけることができる，もう一つは国際的反核運動が強力になればなるほどそれを「異常」という文脈の中に位置づけることは困難になるということである。[71] 国際的反核運動の重要性は正にこの点にあると言えよう。

註

1. 政治的現実の問題に関しては Edelman (1964, 1971), Graber (1976) 参照。なお Luckham (1983), Walker (1983) は一般的な傾向とは異なり言語の軍事化の問題を考慮している。
2. Korzybski (1933) 参照。
3. Marcuse (1964), p.88。
4. Marcuse (1964), p. 88。
5. Rapoport (1980), p. 301。
6. Orwell (1956), p. 363。
7. Blakar の研究は主に性差別用語における言語の社会力 (social power) に関係している。この点に関しては Blakar & Tove (1980) 参照。また，「侵略」や「テロ」という言葉が，いかにメディアに用いられているかという分析が Blakar の立場を実証している。Carey (1980) 参照。
8. Laqueur (1981a), p. 3。
9. Orwell (1956), p. 364。
10. Edelman (1971), p. 69。
11. Gergen (1982), p. 143。

12. この二つの隠喩の働きに関しては Sapir (1977) 参照。
13. Slater (1975), p. 462。
14. 文献リストが Shibles (1971) によって編集されている。
15. Butcher (1951) 参照。
16. タイプ1の例は，ある特定の政治体制を特徴づけるために，あらゆる政治体制の総括的な名称を用いた場合。タイプ2はあらゆる支配者を特徴づけるために「独裁者」というような種の支配者を用いた場合。タイプ3は「支配者」という種を一つの領域から別の領域へ（例えば，家庭の父から政治の大統領へ）と用いた場合。タイプ4は誰かが「国家の舵をとる」という言い方に見られるように，ある領域の活動(航海)を別の領域（政治）に転用した場合。例の中には Miller (1979), p. 156 の例を参照したものもある。
17. 政治学におけるこれらの二大学説については Miller (1979) 参照。
18. Haynes (1975), p. 272, 傍点は筆者。
19. Hobbes (1955), part 1, ch. 5, Locke (1959), bk. 3 ch. 10, Whelan (1981)。
20. Miller (1979), pp. 158–159。
21. Black (1962) は Richards (1965) の説を利用し「比較説」(comparison view) と「代用説」(substitution view) とを区別している。
22. Black (1962), p. 39, 傍点は筆者。隠喩が新しい意味を創造するという見解は Cassirer (1946), Wheelwright (1962) 参照。
23. Black (1962), p. 37, (1979), p. 37, 傍点は筆者。
24. Black (1979), p 38。
25. 隠喩の段階に関しては Turbayne (1962) 参照。
26. Brown (1976), Pepper (1970), Johnson (1978) 参照。
27. Deutsch (1951) 参照。
28. Deutsch (1951), p. 235, 傍点は筆者。
29. Love の引用文 (1965), pp. 185－186。
30. Love (1965), p. 193。
31. Roberts (1941), p. 1, Barnard の引用文 (1966), p. 281。バークは機械論的隠喩の欠点を批判しているにも拘らず，その隠喩や建築からの隠喩を用いている。異なる領域からの隠喩を選択することによって，バークは自らの思想を明白に伝えようとしたのであろう。しかし，一般的には，有機体論的隠喩はバークの代表的な隠喩と看做されている。有機体論的隠喩から機械論的隠喩への変化については Landau (1972) 参照。バークの思想においては「成長」(growth) が「変化」あるいは「進歩」という意味合いを持っているとは限らない。Love (1965) が指摘するように英国憲法の成長は成熟 (maturation) である。Nisbet (1969) は西洋思想における「成長」という隠喩の重要性を論じている。
32. Landau (1972)。

33. Marcuse (1964)。

34. Mills (1982)。

35. 核時代における不完全な「現実の地図」の危険性については Rapoport (1980) 参照。Mills (1958) は「狂気の現実主義」(crackpot realism) と名づけている。また,物理学者は科学モデル(現実の地図)とそのモデルが描くべき「現実」(地勢)とを,いかに混同してきたかという興味深い説に関しては Capra (1977) 参照。

36. 「病気ー治療」の隠喩に関しては Horton (1966) 参照。

37. Sontag (1978), p. 63, ソンタグ(1982), p. 96。

38. Sontag (1978), pp. 64－65, ソンタグ(1982), p. 97－98。

39. Sontag (1978), p. 69, 傍点は筆者, ソンタグ(1982), p. 104。

40. 引用文は Black (1970), Halverson (1971) 参照。Hahn (1978) の批判も参照のこと。癌の隠喩は他の文脈においても用いられている。例えば, John Dean の米議会証言は『(ニクソン)大統領制に癌の恐れがある』と。Sternberg *et al.*, (1979), p. 349。Black (1970, p. 116) は極右反共主義者の核戦争に関する言述(ディスコース)に癌の隠喩が含まれていることについて次のように指摘している。「極右は他の人よりも核戦争への恐れがなさそうである。これはおそらく核戦争の被害の予想が他の人と異なるというより, むしろ, 政治体の運命がもう既に決まっているという確信がこの隠喩の連想であろう。そのため, 政治体の保存 ── 既に破壊しつつ, 最後の息を引きとろうとしている有機体の保存 ── はそれほど重要でほない」。

41. Schon (1979), p.262, 傍点は筆者。

42. Edelman (1964), Levi-Strauss (1966), Lakoff & Johnson (1980) 参照。

43. Schon (1979)。

44. Lakoff & Johnson (1980), pp.156－157, 傍点は原文。

45. *Japan Times*, July 4, 1983.

46. 朝日新聞 1964年8月29日。

47. 「核持ち込み」問題について次を参照。上田 (1980), 古森 (1982), 新原 (1981)。

48. 朝日新聞 1967年10月28日。荒瀬・岡安 (1968) も参照。

49. 荒瀬・岡安 (1968, pp. 76－77 傍点は原文) は朝日のワシントン特派員の松山幸雄氏に問い合せ, 氏の答えの一部分を引用する。『あの記事を書いた当時「核兵器アレルギー」という言葉をアメリカ側の役人から聞いたことはありません……。あれはどこかで聞いたり見たりした言葉が, 頭の底に残っていて, (たしかに新聞記事としては初めてかもしれませんが) それを借用した, とも考えられるし, あるいは日本人どうしの会話で, それに近いヤリトリをしていて…それを私が無意識の中に「核アレルギー」といった言葉にまとめあげた, とも考えられます』。

50. 「反対隠喩」について Edelman (1971), p. 69, Gergen, (1982), pp.143－145 参照。

51. 例えば，朝日新聞　1968年1月11日。

52. 「準拠国」（reference country）は「準拠集団」（reference group）という社会学の概念を基礎に考えた言い方である。

53. 例えば，朝日新聞論壇1967年12月4日。

54. Pempel（1975）。

55. Tuft（1973），p. 2，傍点は筆者。

56. Johnson（1978，p. 536）はパレスチナの隠喩分析において次のように結論を下している。「この分析における主要点の一つは，これらの隠喩は曖昧で色々に解釈しうるということである。この曖昧さはこれらの隠喩が要約でき，また拡大できるような…方法を提供する」。さらに Johnson は Leach（1954，p. 106）と同様に曖昧さは主要なシンボル全てに共通する特徴であると述べている。核アレルギーの分析は政治的隠喩が曖昧であり，また，政治的要求によって色々に解釈されるものである，という Johnson と Leach の研究成果を支持する。

57. Lackoff & Johnson（1980），p. 167の引用文。

58. 第二十二部　沖縄問題等に関する特別委員会会議録第一号　昭和四十二年十二月四日，六頁，傍点は筆者。ここで見られる「核」の意味は曖昧であり，核アレルギーは核兵器だけではなく，原子力，いわゆる「平和利用」に対する「アレルギー」である，ということである。この曖昧さが核問題の核心を隠蔽するように政治的機能を果たす。松尾（1983）は大学生の平和観研究によると「核」（55%）の頻度率は「核兵器」（47%）のそれより高く，もっとも高いものである。また，高校生の「核」連想観は，「暗い」広島・長崎のイメージから「明るい」「平和利用」のイメージに移行している。これは核アレルギーの政治的機能や政府宣伝活動と無関係ではなかろう。朝日新聞 1978年10月30日参照。

59. 楠田（1975），p. 167。

60. 日本の政治的発言（ディスコース）の中で核問題や防衛問題などをタブーとしている政治家が少なくない。Hertzler（1965，p. 24－26）は現実を操作するために言葉がタブー視されることが多い，ということを指摘している。また，Anderson（1964，p. 56）は隠喩とタブーがいかに関係しているか指摘している。それは隠喩が何かタブーを表す語句の代わりに生み出されているということである。1960年代より1980年代においては核問題や防衛問題を論ずることは容易になっている。これは Kennedy（1967，p. 701）の指摘するように「…タブーは人間の社会創造の中において最も捨てやすい習慣である」。Boulding（1978）の戦争と平和の境界線という概念を用いれば，1980年代の戦争・平和言述（ディスコース）の境界線は佐藤政権の1960年代より戦争寄りになってきたと言えよう。

61. 核アレルギー隠喩の機能力はアレルギー減感作療法と「核アレルギー」減感作療法が同じような療法であるからではない。というのは療法は専門知識であり，その知識が一般情報環境の中に定着していないからである。

62. 米空母エンタープライズの日本寄港の際に，1968年の抗議の声は「どん」という音が

したと比喩的に言えば，1983年の抗議の声は「すうん」という音がしたと言えよう。

63. 「平和」利用に反対する女性が多いために科学技術庁の政府機関の宣伝には女性モデルが目立つ。高田（1982）アンケート調査の結果は女性の反核意識を明らかにしている。

64. 例えば，朝日新聞投書欄1968年7月23日参照。

65. 朝日新聞1966年9月5日夕刊。

66. Almond & Verba（1963），Irokawa（1983）参照。

67. Szasz（1961）は，精神病学における隠喩が誤まったものであり，即ち，精神病学者が行う電気ショック，ロボトミー手術は狂気が社会的条件ではなく，身体的条件による病気である，という隠喩を用いた結果であると論ずる。隠喩の機能を解明する意義がここにうかがわれる。

68. Russell（1960）。

69. 普遍的な言述（ディスコース）の強弱については Walker（1983）参照。

70. Eichenburg（1983），Forest（1982），Laqueur（1981b）参照。

71. 「意味体制」（regime of meaning）については Barthes（1977），p. 177 参照。

日本語文献

荒瀬豊・岡安茂祐　1968。『「核アレルギー」と安保公害ーシンボル操作・一九六八年ー』『世界』3月号，pp. 73－84。

上田耕一郎　1980。『80年代と安保論争』東京，大月書店。

楠田實　1975。『首席秘書官　佐藤総理との十年間』東京，文藝春秋。

古森義久　1982。『核は持ち込まれたか』東京，文藝春秋。

新原昭治　1981。『核戦争の基地日本』東京，新日本出版社。

ソンタグ，スザン（富山太佳夫訳）1982。『隠喩としての病い』東京，みすず書房。

高田和夫　1982。「九州大学生の平和意識 ー アンケート調査の初歩的分析」『社会科学論集』第22集　pp. 107－142。

松尾雅嗣　1983。「連想調査による『平和』の意味分析」広島大学平和科学研究センター研究報告　No. 8

英語文献

Almond, Gabriel & Sydney Verba 1963. *The Civic Culture: Political Attitudes and Democracy in Five Nations.* New York: Little Brown.

Anderson, C.C. 1964. 'The Psychology of the Metaphor', *The Journal of Genetic Psychology*, vol. 105, no. 1, pp. 53–73.

Barnard, F.M. 1966. 'Metaphors, Laments, and the Organic Community', *The Canadian*

Journal of Economics and Political Science, vol. 32, no. 3, pp. 281–301.

Barthes, Roland 1977. *Image-Music-Text*. Glasgow: Fontana.

Black, Edwin 1970. 'The Second Persona', *The Quarterly Journal of Speech*, vol. 56, no. 2, pp. 109–119.

Black, Max 1962. *Models and Metaphors: Studies in Language and Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.

Black, Max 1979. 'More about Metaphor', pp. 19–43, in Andrew Ortony, ed. *Metaphor and Thought*. Cambridge: Cambridge University Press.

Blakar, Rolv M. 1979. 'Language as a Means of Social Power', pp. 131–169, in J.L. Mey, ed. *Pragmalinguistics: Theory and Practice*, Series Janua Linguarum, 85, The Hague: Mouton.

Blakar, Rolv M. & B.P. Tove 1980. 'Sex-bound Patterns of Control in Verbal Communication', Paper presented at the Conference on Language and Power, April, Bellagio, Italy.

Boulding, Kenneth 1978. *Stable Peace*. Texas: University of Texas Press.

Brown, Richard H. 1976. 'Social Theory as Metaphor: On the Logic of Discovery for the Sciences of Conduct', *Theory and Society*, vol. 3, no. 2, pp. 169–197.

Butcher, S. 1951. *Aristotle's Theory of Poetry and Fine Art*. New York: Dover.

Capra, Fritjof 1977. *The Tao of Physics*. New York: Bantam Press.

Carey, Alex 1980. 'Word-Power in Politics: "Terror", "Aggression", and "Refugees" in the Semantics of Violence and Repression', *Et cetera*, vol. 37, no. 1, pp. 53–64.

Cassirer, Ernst 1946. *Language and Myth*. New York: Dover.

Deutsch, Karl 1951. 'Mechanism, Organism and Society: Some Models in Natural and Social Science', *Philosophy of Science*, vol. 18, no. 3, pp. 230–252.

Edelman, Murray 1964. *The Symbolic Uses of Politics*. Urbana: University of Illinois Press.

Edelman, Murray 1971. *Politics as Symbolic Action*. Chicago: Markham.

Eichenburg, R.C. 1983. 'The Myth of Hollanditis', *International Society*, vol. 8, no. 2, pp. 143–159.

Forest, Jim & Peter Herby 1982. 'Hollanditis: Europe's Plague of Peace', *IFOR Report*, January, pp. 3–11.

Gergen, Kenneth J. 1982. *Toward Transformation in Social Knowledge*. New York: Springer-Verlag.

Graber, Doris A. 1976. *Verbal Behaviour and Politics*. Urbana: University of Illinois Press.

Hahn, D.F. 1978. 'Metaphors, Myth and American Politics', *Et cetera*, vol. 35, no. 3,

pp. 254–264.

Halverson, John 1971. 'The Psycho-pathology of Style: The Case of Right-Wing Rhetoric', *The Antioch Review*, vol. 3, no. 1, pp. 97–108.

Haynes, F. 1975. 'Metaphor as Interactive', *Educational Theory*, vol. 25, no. 3, pp. 272–277.

Hertzler, Joyce 1965. *A Sociology of Language*. New York: Random House.

Hobbes, Thomas 1955. *Leviathan*, ed. Michael Oakeshot, Oxford: Blackwell.

Horton, John 1966. 'Order and Conflict Theories of Social Problems as Competing Ideologies', *American Journal of Sociology*, vol. 71, no. 6, pp. 701–713.

Irokawa, Daikichi 1983. 'The Subject Mentality', *Japan Quarterly*, vol. 30, no. 1, pp. 28–38.

Johnson, Nels 1978. 'Palestinian Refugee Ideology: An Enquiry into Key Metaphors', *Journal of Anthropological Research*, vol. 34, no. 4, pp. 524–539.

Kennedy, John G. 1967. 'Mushahara: A Nubian Concept of Supernatural Danger and the Theory of Taboo', *American Anthropologist*, vol. 69, no. 6, pp. 685–702.

Korzybski, A. 1933. *Science and Sanity*. Lakeville, Conn: International Non-aristotelian Library.

Lakoff, George & Mark Johnson 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago and London: University of Chicago Press.

Landau, Martin 1972. *Political Theory and Political Science*. New York: MacMillan.

Laqueur, Walter 1981a. 'Foreign Policy and the English Language', *The Washington Quarterly*, vol. 4, no. 1, pp. 3–12.

Laqueur, Walter 1981b. 'Hollanditis: A New Stage of European Neutralism', *Commentary*, vol. 72, no. 2, pp. 19–26.

Leach, E.R. 1954. *Political Systems of Highland Burma*. London: University of London, The Athlone Press.

Levi-Strauss, Claude 1966. *The Savage Mind*. Chicago: University of Chicago Press.

Locke, John 1959. *An Essay Concerning Human Understanding*, ed. Alexander Campbell Fraser, New York: Dover.

Love, Walter D. 1965. 'Edmund Burke's Idea of the Body Corporate: A Study in Imagery', *Review of Politics*, vol. 27, no. 2, pp. 184–197.

Luckham, Robin 1983. 'The Armament Culture', paper presented at the Global Structure of Communication Commission, 10th General Conference of IPRA, Györ, September.

Marcuse, Herbert 1964. *One Dimensional Man*. Boston: Beacon Press.

Miller, Eugene F. 1979. 'Metaphor and Political Knowledge', *The American Political*

Science Review, vol. 73, no. 1, pp. 155–170.

Mills, C. Wright 1958. *The Causes of World War Three.* New York: Simon and Schuster.

Mills, William J. 1982. 'Metaphorical Vision: Changes in Western Attitudes to the Environment', *Annals of the Association of American Geographer*, vol. 72, no. 2, pp. 237–253.

Nisbet, Robert A. 1969. *Social Change and History. Aspects of the Western Theory of Development.* Oxford: Oxford University Press.

Orwell, George 1954. *Nineteen Eighty-Four.* Harmondsworth: Penguin Books.

Orwell, George 1956. 'Politics and the English Language', *The Orwell Reader.* New York: Harcourt Brace, pp. 355–366.

Pempel, T. J. 1975. 'Japan's Nuclear Allergy', *Current History*, vol. 68, no. 404, pp. 169–173, 183.

Pepper, Steven, 1970. *World Hypotheses: A Study in Evidence.* California: University of California Press.

Rapoport, Anatol 1980. 'Verbal Maps and Global Politics', *Et cetera*, vol. 37, no. 4, pp. 297–313.

Richards, I.A. 1965. *The Philosophy of Rhetoric.* London: Oxford University Press.

Roberts, Morley 1941. *The Behaviour of Nations.* London: Dent.

Russell, Bertrand 1960. *Common Sense and Nuclear War.* Tokyo: Seibido.

Sapir, J.D. 1977. 'The Anatomy of Metaphor', pp. 3–32 in J.D. Sapir & J.C. Crocker, eds. *The Social Use of Metaphor: Essays on the Anthropology of Rhetoric.* University of Pennsylvania Press.

Schon, Donald A. 1979. 'Generative Metaphor: A Perspective on Problem-Setting in Social Policy', pp. 254–283, in Andrew Ortony, ed. *Metaphor and Thought.* Cambridge: Cambridge University Press.

Shibles, Warren A. 1971. *Metaphor: An Annotated Bibliography and History.* Whitewater, Wisconsin: Language Press.

Slater, Ian 1975. 'Orwell, Marcuse and the Language of Politics', *Political Studies*, vol. 23, no. 4, pp. 459–474.

Sontag, Susan 1978. *Illness as Metaphor.* New York: Farrar, Staraus and Giroux.

Sternberg, Robert J., R. Tourangeau & G. Nigro 1979. 'Metaphor, Induction, and Social Policy: The Convergence of Macroscopic and Microscopic Views', pp. 325–353, in Andrew Ortony, ed. *Metaphor and Thought.* Cambridge: Cambridge University Press.

Szasz, Thomas S. 1961. *The Myth of Mental Illness.* New York: Harper Row.

Tuft, L. 1973. *Allergy Management in Clinical Practise.* Saint Louis: Mosby.

Turbayne, Colin Murray 1962, *The Myth of Metaphor.* New Haven: Yale University Press.

Walker, R.B.J. 1983. 'Contemporary Militarism and the Discourse of Dissent', paper presented in the Politics and Economy of Militarization and Demilitarization Commission, 10th General Conference of IPRA, Györ, September.

Wheelwright, Philip 1962. *Metaphor and Reality.* Bloomington: Indiana University Press.

Whelan, Frederick G. 1981. 'Language and Its Abuses in Hobbes' Political Philosophy', *The American Political Science Review,* vol. 75, no. 1, March, pp. 59–75.